

大学教育の達成度調査

東京大学教育企画室

教育企画室長 吉見俊哉

分析：大学総合教育研究センター

大学改革基礎調査部門

回収状況

表 1 2011 年度達成度調査回収状況

学部	調査票 配布数	卒業者数	内訳	有効回収数	回収率
1. 法学部	630	425		407	95.8%
2. 医学部	160	121	{ 6年制 102名 4年制 19名	18	14.9%
3. 工学部	1,200	978		631	64.5%
4. 文学部	550	352		272	77.3%
5. 理学部	392	318		240	75.5%
6. 農学部	330	279	{ 6年制 36名 4年制 243名	257	92.1%
7. 経済学部	440	333		304	91.3%
8. 教養学部	250	154		144	93.5%
9. 教育学部	140	110		105	95.5%
10. 薬学部	100	91	{ 6年制 7名 4年制 84名	90	98.9%
合計	4,192	3,161		2,468	78.1%

回収率は、全体としては年々増加しており、2010年度は62.4%、2011年度は78.1%（最終回答）となっている。昨年まで低かった法学部と教養学部と教育学部が大幅に上昇した。他方、医学部と工学部は昨年より若干低下した。

あなた自身についてお聞きします。

Q1 科類と Q3 所属学部

※ 今年度の調査で初めて科類をたずねた。このため科類と所属学部の関連が捉えられるようになった。

注 ※は、今年度の調査で特に変更された点や注意点を示している。

表 2 科類と所属学部

	法学部	医学部	工学部	文学部	理学部	農学部	経済学部	教養学部	教育学部	薬学部	合計
文Ⅰ	389	0	2	11	0	0	2	5	1	1	411
文Ⅱ	4	1	2	27	0	6	246	26	9	0	321
文Ⅲ	9	2	5	213	0	16	23	64	82	0	414
理Ⅰ	2	1	548	10	173	27	17	26	4	19	827
理Ⅱ	3	0	64	5	65	207	15	20	9	70	458
理Ⅲ	0	14	0	0	2	0	0	1	0	0	17
	407	18	621	266	240	256	303	142	105	90	2,448

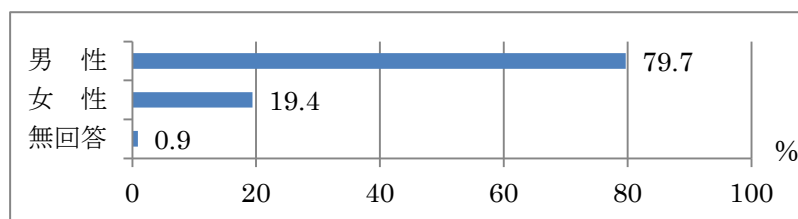
(注) 科類の無回答が 20 サンプルあるため、表 2 の有効回答数は 2,448 票となっている。

※ 以下は、有効回答数 2,468 票の集計結果である。

Q5 性別

1.男性 (79.7%) 2.女性 (19.4%) 無回答 (0.9%)

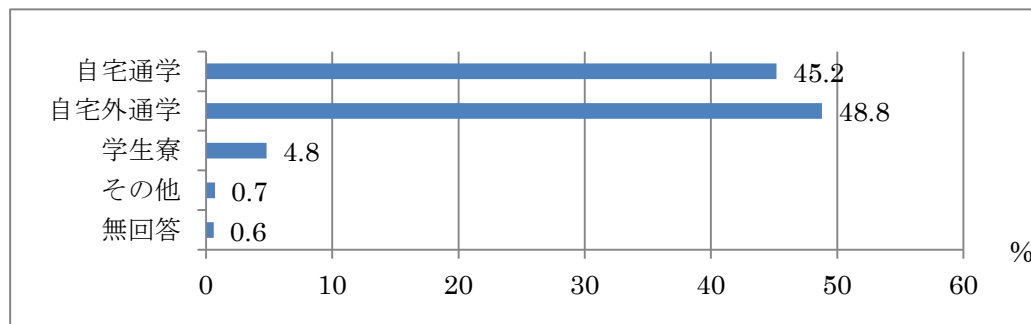
図 1 性別



Q6 通学

1.自宅通学 (45.2%) 2.自宅外通学(48.8%) 3.学生寮(4.8%) 4.その他(0.7%) 無回答 (0.6%)

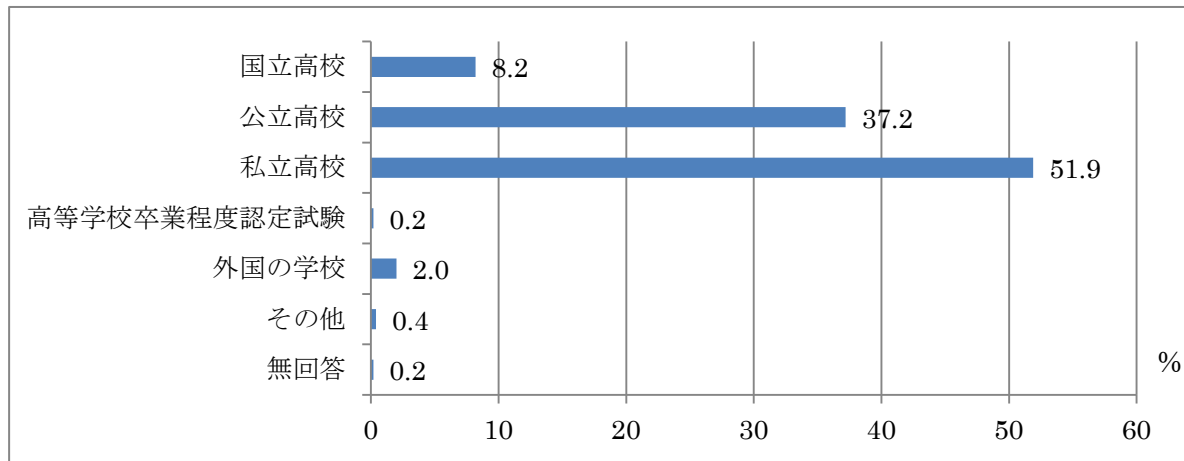
図 2 通学



Q7 出身高校等

1.国立高校（8.2%） 2.公立高校（37.2%） 3.私立高校（51.9%） 4.高等学校卒業程度認定試験（廃止前の大学入学資格検定）（0.2%） 5.外国の学校（2.0%） 6.その他（0.4%） 無回答（0.2%）

図3 出身高校等

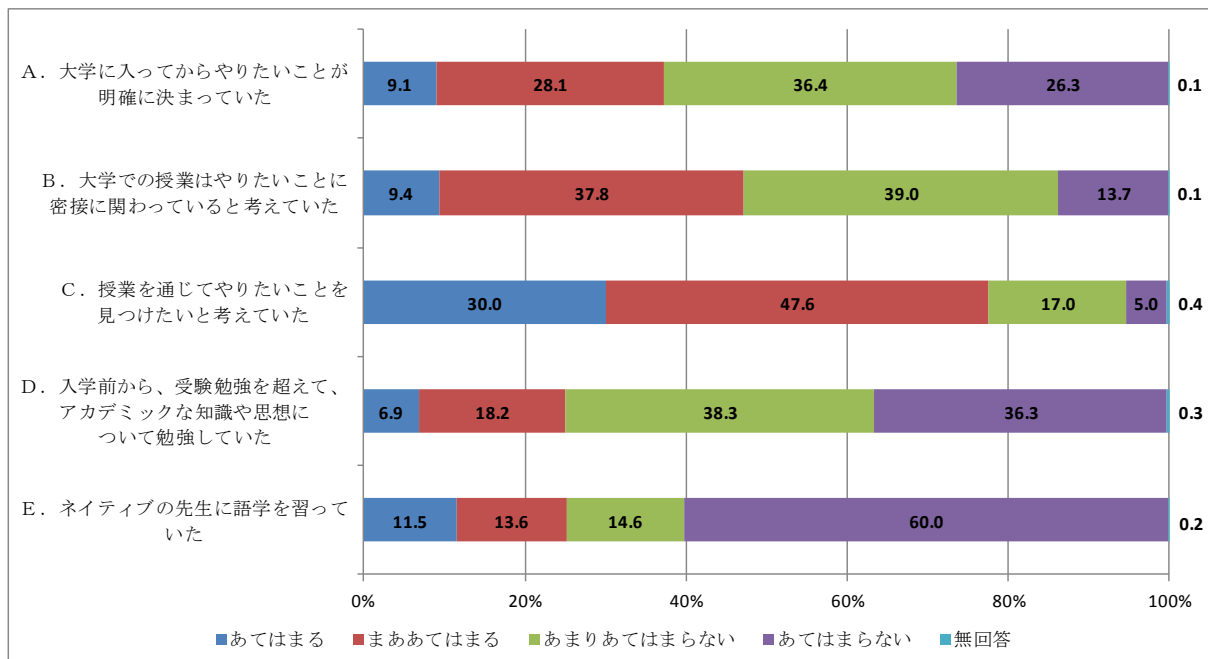


※ 回答者の女子学生比率は 19.4%、2010 年度の卒業者の女子学生比率は 19.6%（『東京大学の概要資料編』2011 年度）。自宅通学生は 45.2%に対して「学生生活実態調査」2010 年度では全学部生で 48.1%、私立高校出身者は 51.9%に対して「学生生活実態調査」では 51.8%と回答者の属性は母集団と大きな誤差はないとみられる。

東京大学での学習

Q8 入学時の様子についてお聞きします。つぎのことは、どの程度あてはまりますか。

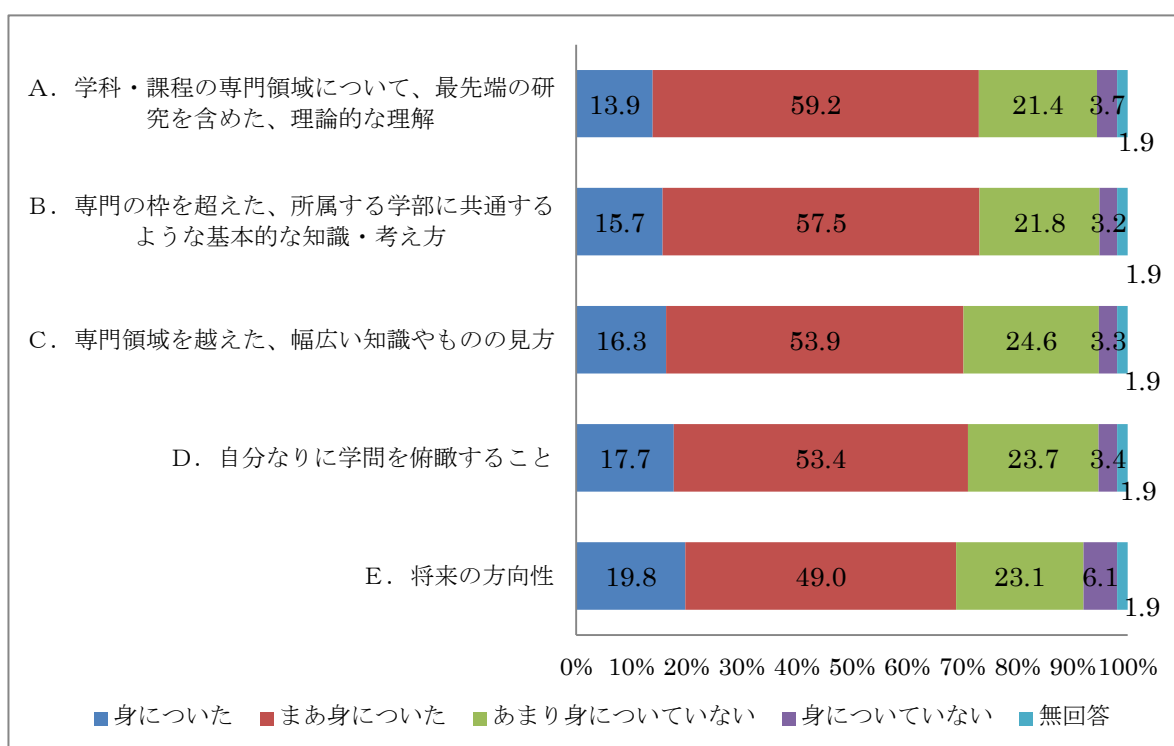
図4 入学時の様子



「A. 大学に入ってからやりたいことが明確に決まっていた」（「あてはまる」＋「まああてはまる」を合わせて37.2%、以下同じ）や「B. 大学での授業はやりたいことに密接に関わっていると考えていた」（47.2%）学生はいずれも半数以下で、「C. 授業を通じてやりたいことを見つけたいと考えていた」が4分の3以上（77.6%）と、入学時には、東京大学の教育の特徴であるlate specializationに沿った学習志向性を持っていた。これに対して、「D. 入学前から、受験勉強を超えて、アカデミックな知識や思想について勉強していた」（25.1%）や「E. ネイティブの先生に語学を習っていた」（25.1%）と、入学以前に学習に対する準備を十分していた学生は、4分の1となっている。

Q9 あなたは、東京大学の教育を通じて、以下のような点を身につけたと思いますか。

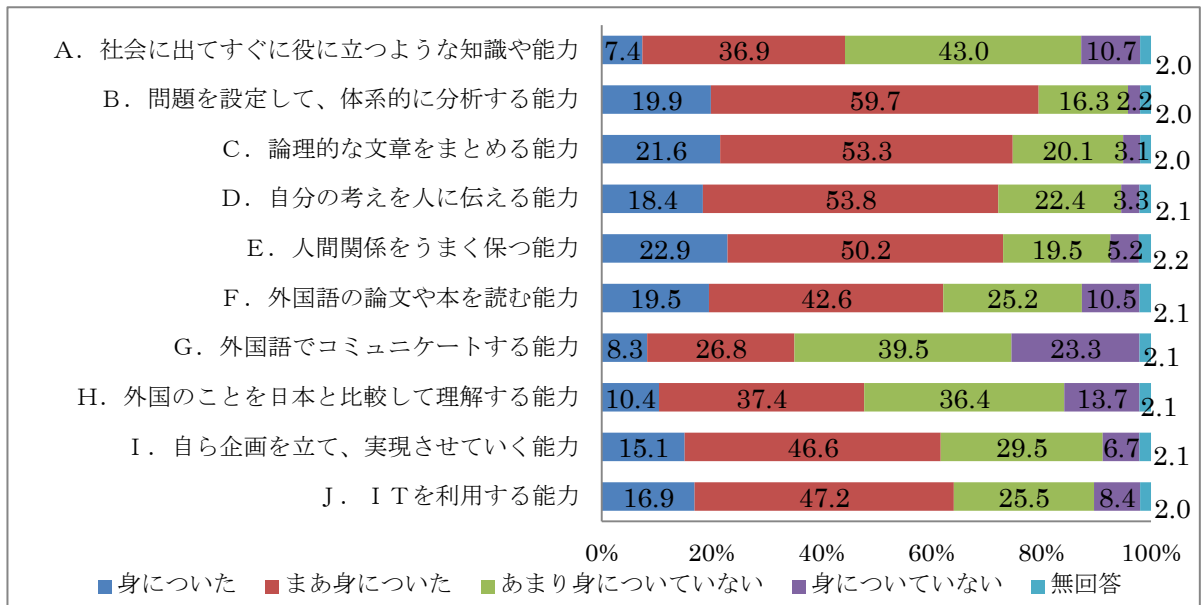
図5 東京大学の教育を通じて身につけたこと



学生が東京大学の教育を通じて身についたと自己評価しているのは、「A. 学科・課程の専門領域について、最先端の研究を含めた、理論的な理解」（「身についた」と「まあ身についた」を合わせて73.1%、以下同じ）、「B. 専門の枠を超えた、所属する学部に通ずるような基本的な知識・考え方」（73.2%）、「C. 専門領域を越えた、幅広い知識やものの見方」（70.2%）、「D. 自分なりに学問を俯瞰すること」（71.1%）で、大学教育の2つの目的、すなわち専門的な深い能力と幅の広い能力が、「身についた」と「まあ身についた」を合わせて、いずれも7割以上である。しかし、「身についた」のみではいずれも2割以下となっている。

Q10 あなたは、大学時代を通じて、以下のような点を身につけたと思いますか。

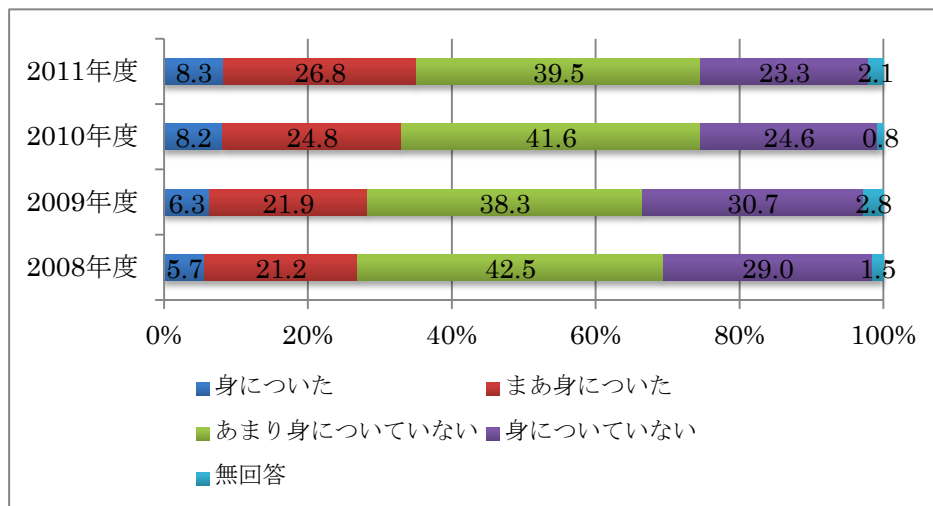
図 6 身につけた能力



学生が大学時代を通じて身につけたとしているのは、「B. 問題を設定して、体系的に分析する能力」（「身についた」と「まあ身についた」を合わせて79.6%、以下同じ）、「C. 論理的な文章をまとめる能力」(74.9%)、「D. 自分の考えを人に伝える能力」(72.2%)、「E. 人間関係をうまく保つ能力」(73.1%)といった汎用性の高い一般的な能力であり、「A. 社会に出てすぐに役に立つような知識や能力」が身についたとしている学生は約4割（44.3%）に過ぎない。他方、「F. 外国語の論文や本を読む能力」は約3分の2（62.1%）の学生が身についたとしているのに対して、「G. 外国語でコミュニケーションする能力」が身についたとしている学生は3分の1（35.1%）に過ぎない。

※ 今年度の調査で新たに「外国のことを日本と比較して理解する能力」を加えた。「身についた」学生は10.4%、「まあ身についた」学生は37.4%で合わせて47.8%の学生が身についたとしている。

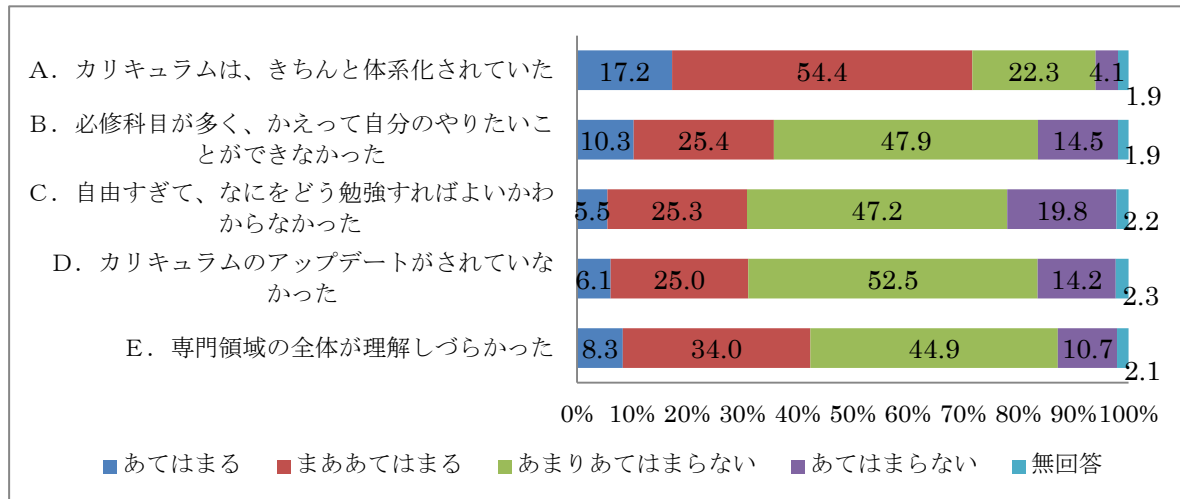
図 7 「G. 外国語でコミュニケーションする能力」の推移



※ 上記の図6の身につけた能力については、前年度調査までとほとんど同じ比率となっている。しかし、「G. 外国語でコミュニケーションする能力」については、図7のように、わずかではあるが、身についたと答えた者の割合が年々高くなってきている。

Q11 東京大学の専門学部・学科等のカリキュラムについてお聞きします。

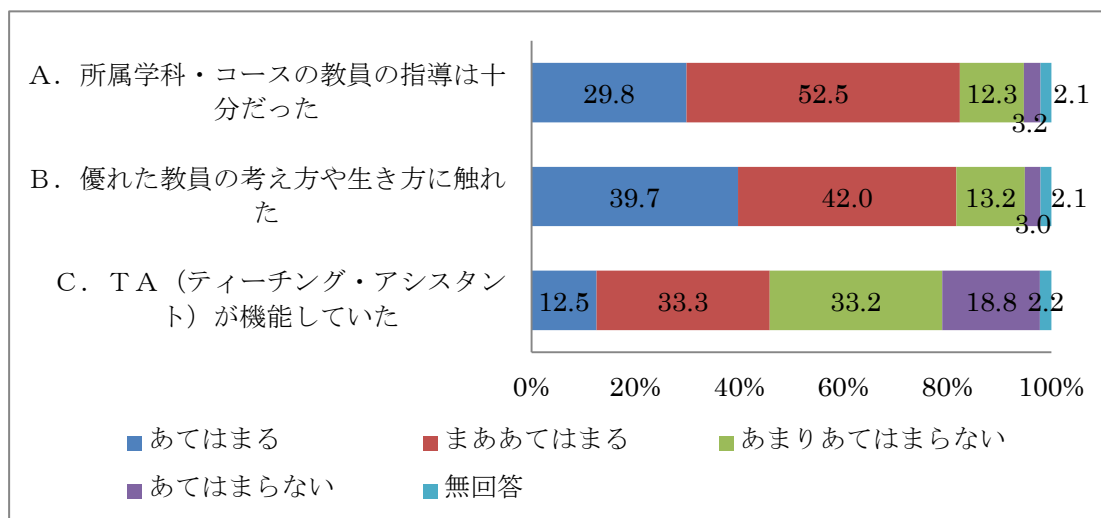
図8 専門学部・学科等のカリキュラムについて



カリキュラムについては、「A. カリキュラムは、きちんと体系化されていた」とする学生が、71.6%と7割を超えている。「B. 必修科目が多く、かえって自分のやりたいことができなかつた。」(35.7%)「C. 自由すぎて、なにをどう勉強すればよいかわからなかつた」(30.8%)、「D. カリキュラムのアップデートがされていなかった」(31.1%)という否定的な評価項目について「あてはまる」と「まああてはまる」とする回答は約3割であり、全体として約7割の学生は肯定的に評価している。しかし、「E. 専門領域の全体が理解しづらかつた」という学生も約4割(42.3%)となっている。

Q12 教員や教育制度との関係についてお聞きします。

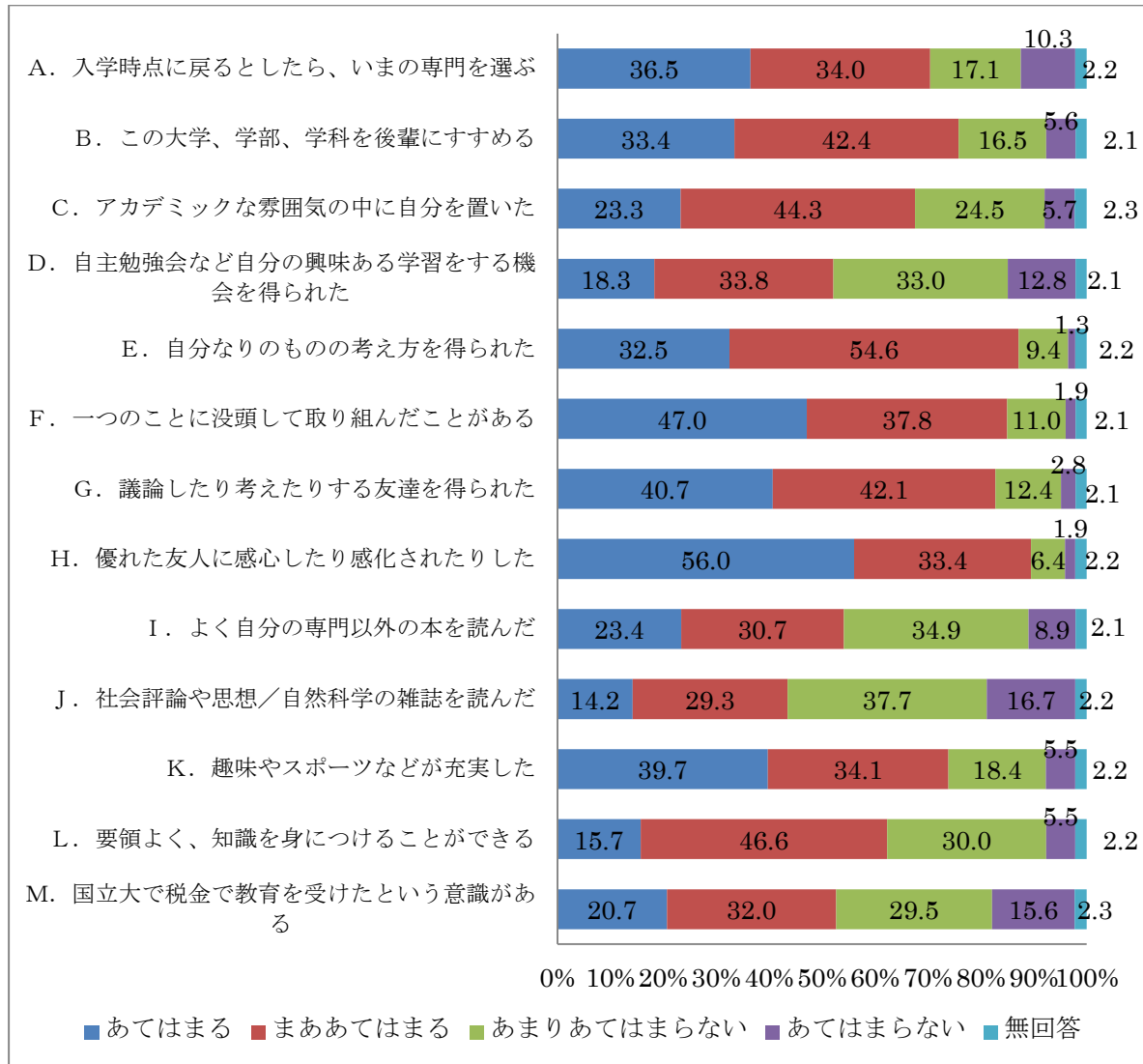
図9 教員や教育制度との関連



「A. 所属学科・コースの教員の指導は十分だった」(82.3%)で「B. 優れた教員の考え方や生き方に触れた」(81.7%)が8割を超えている。反面、「C. TAが機能していた」と評価するのは45.8%と半数以下となっている。

Q13 大学時代を通じての経験を総合して、つぎのようなことはどの程度あてはまりますか。

図 10 大学時代の経験

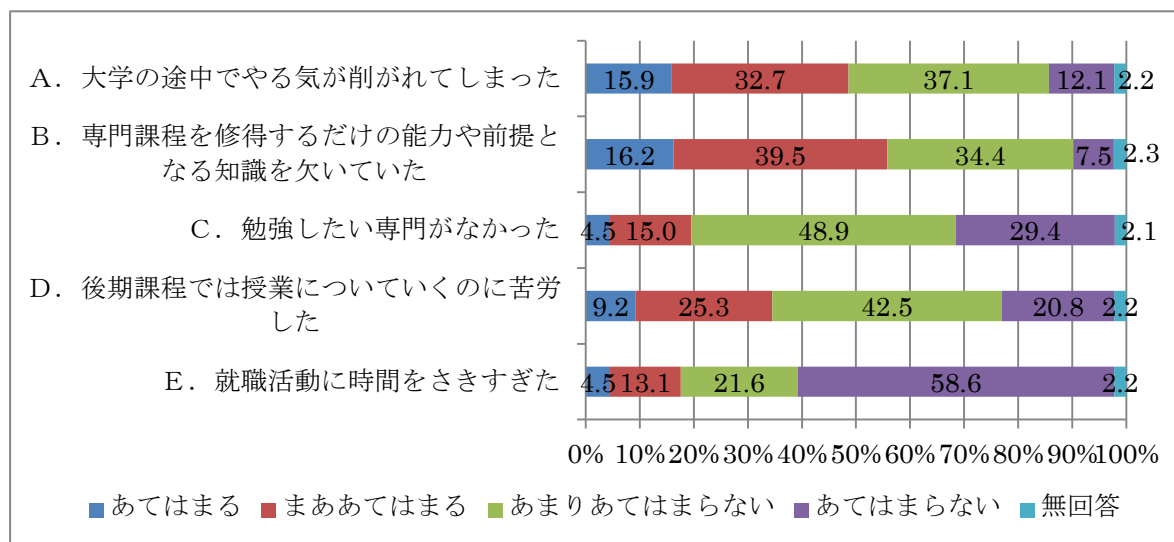


大学時代の経験として最も高く評価されているのは、「H. 優れた友人に感心したり感化されたりした」(89.4%)「G. 議論したり考えたりする友達を得られた」(82.8%)の友人関係でいずれも8割以上となっている。また、「E. 自分なりのものの考え方を得られた」(87.1%)や「F. 一つのことに没頭して取り組んだことがある」(84.8%)という学生も8割を超えている。ただし、「A. 入学時点に戻るとしたら、いまの専門を選ぶ」(70.5%)と「B. この大学、学部、学科を後輩にすすめる」(75.8%)はやや少なくなっている。また、「I. よく自分の専門以外の本を読んだ」(54.1%)や「J. 社会評論や思想/自然科学の雑誌を読んだ」(43.5%)学生の割合は、半数程度である。さらに、「M. 国立大で税金で教育を受けたという意識がある」(52.7%)という

学生も約半数にとどまっている。

Q14 あなたは、大学時代につきのような経験がありましたか。

図 11 大学時代の経験

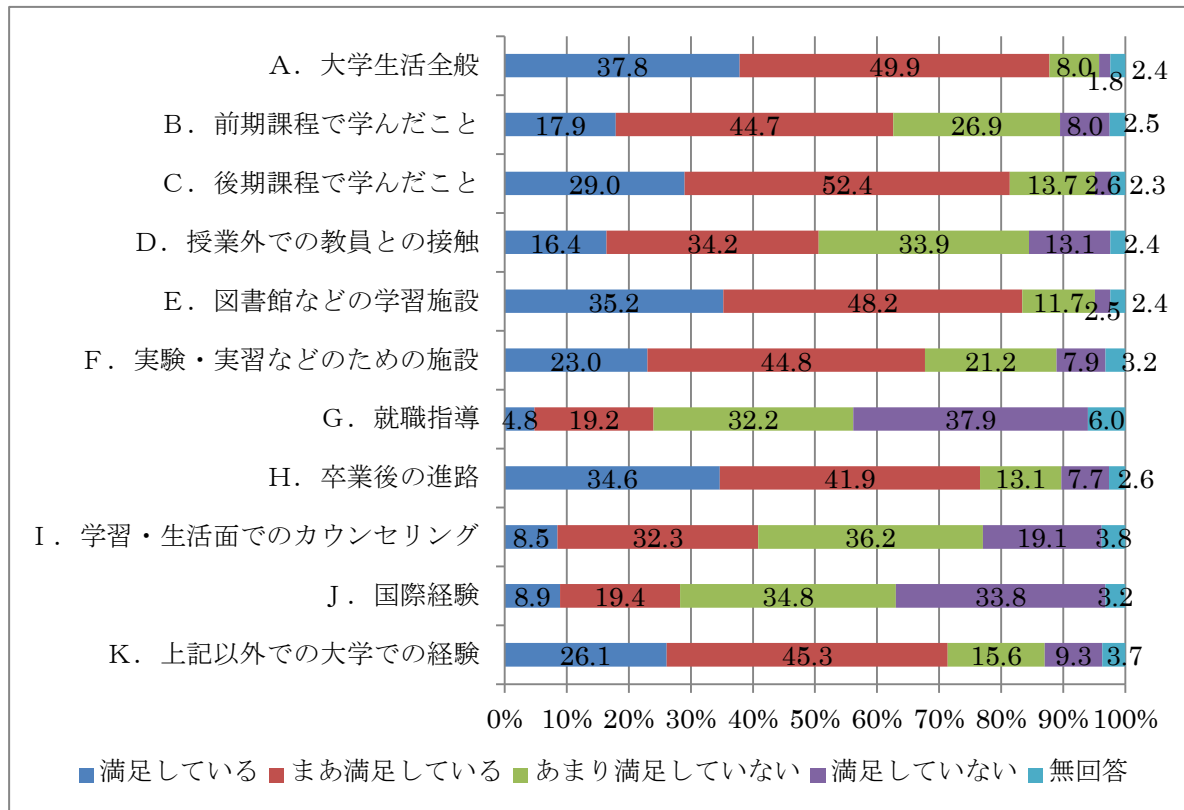


大学時代の否定的な経験としてあげられたのは、「B. 専門課程を修得するだけの能力や前提となる知識を欠いていた」(55.7%)で、半数以上があてはまるとしている。また、「A. 大学の途中でやる気が削がれてしまった」(48.6%)学生も約半数になっている。これに対して、「C. 勉強したい専門がなかった」(19.5%)という回答は2割以下になっている。「E. 就職活動に時間をさきすぎた」(17.6%)については、4月からの予定を「Q30 働く」(後述)とした学生に限ると36.6%となる。

※ 今年度の調査で新たに「D. 後期課程では授業についていくのに苦労した」を加えた。「あてはまる」9.2%、「まああてはまる」25.3%で、あわせて約3分の1(34.5%)となっている。(前年度までは「専門用語などが説明なしに使われ授業についていけなかった」(45.6%))

Q15 あなたの大学生生活を通じた満足度についてお聞きします。

図 12 大学生生活の満足度



「A. 大学生生活全般」に満足している学生は「満足している」と「まあ満足している」を合わせて 87.7%と 9割に近い。「B. 前期課程に学んだこと」(62.6%)は約 6割、「C. 後期課程で学んだこと」(81.4%)と「H. 卒業後の進路」(76.5%)は約 8割が満足している。満足度が低いのは、「G. 就職指導」(24.0%)で約 4分の 1の学生しか満足していない。「I. 学習・生活面でのカウンセリング」(40.8%)も 4割の学生しか満足していない。「D. 授業外での教員との接触」(50.6%)についても、満足している学生は約半数に過ぎない。

※ 今年度の調査で新たに「J. 国際経験」を加えた。「満足している」8.9%、「まあ満足している」19.4%で、あわせても 3割(28.3%)に満たない。

図 13 「Q21A. 大学のプログラム/推薦により留学した」と「Q15 J. 国際経験」の満足度

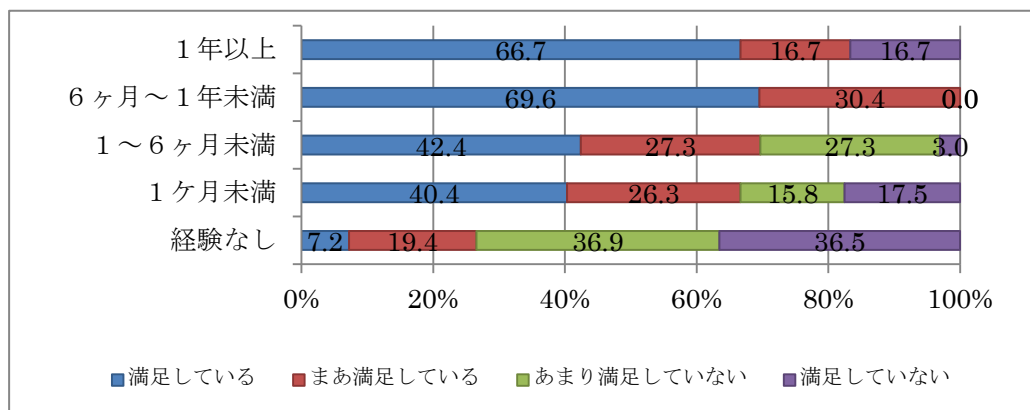


図 13 は、後述の「Q21A. 大学のプログラム／推薦により留学した」と「Q15J. 国際経験」の満足度との関連を示したものである。国際交流経験のない者では、満足度は著しく低く、経験期間が長くなるほど満足度は高まっている。

図 14 「Q21B. 個人留学した（語学学習）」と「Q15J. 国際経験」の満足度

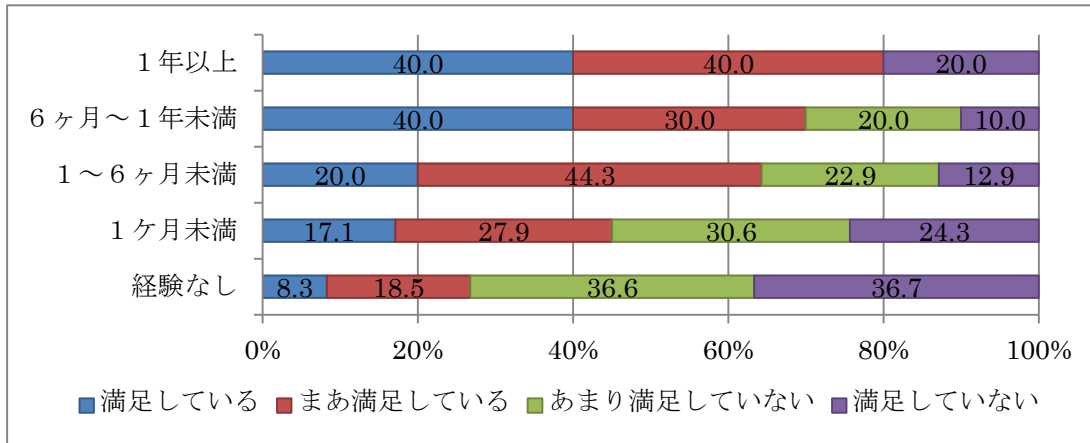


図 14 は、同じように、「Q21B. 個人留学した（語学学習）」と「Q15J. 国際経験」の満足度との関連を示したものである。先と同様に、国際交流経験のない者では、満足度は著しく低く、経験期間が長くなるほど満足度は高まっている。

図 15 「Q21C. 個人留学した（語学学習以外）」と「Q15J. 国際経験」の満足度

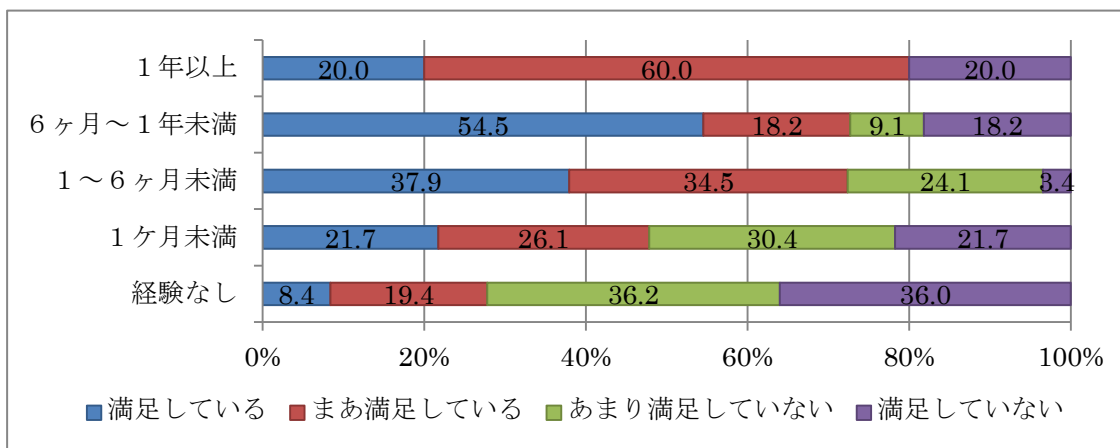
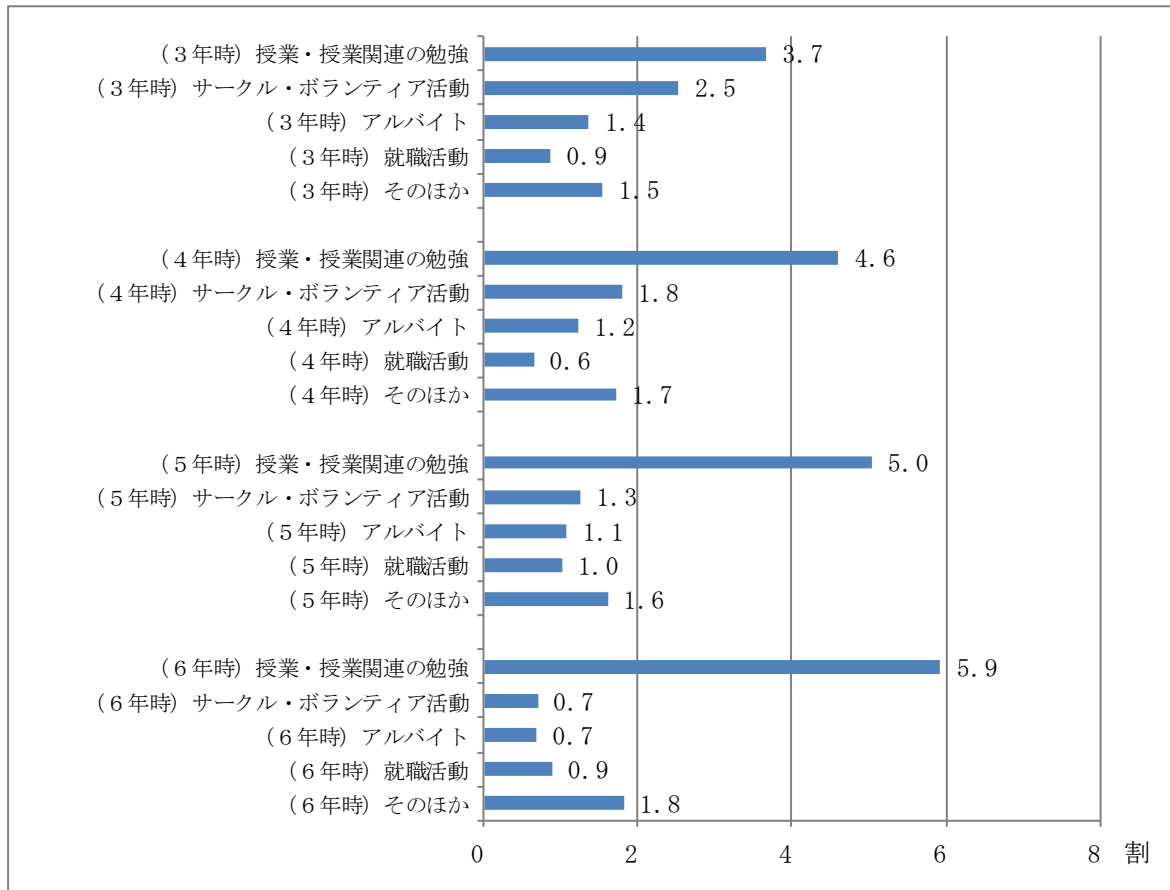


図 15 は、「Q21C. 個人留学した（語学学習以外）」と「Q15J. 国際経験」の満足度との関連を示したものである。「1年以上」で「満足している」が 20.0%と低いが、「まあ満足している」と合わせると、80%が満足している（なお、1年以上のサンプル数は5名である）。

国際経験の満足度と在学時の国際交流経験との関連を見ると、国際交流経験を長期間持つ者ほど満足度が高く、国際交流経験のないことが満足度を低下させていることが分かる。

Q16 あなたは、次のような項目に、時間をどのように配分していましたか。試験を除く、学期中の典型的な週を思い出して、()の中に数値を書いてください。

図 16 生活時間 (平均 単位: 割)

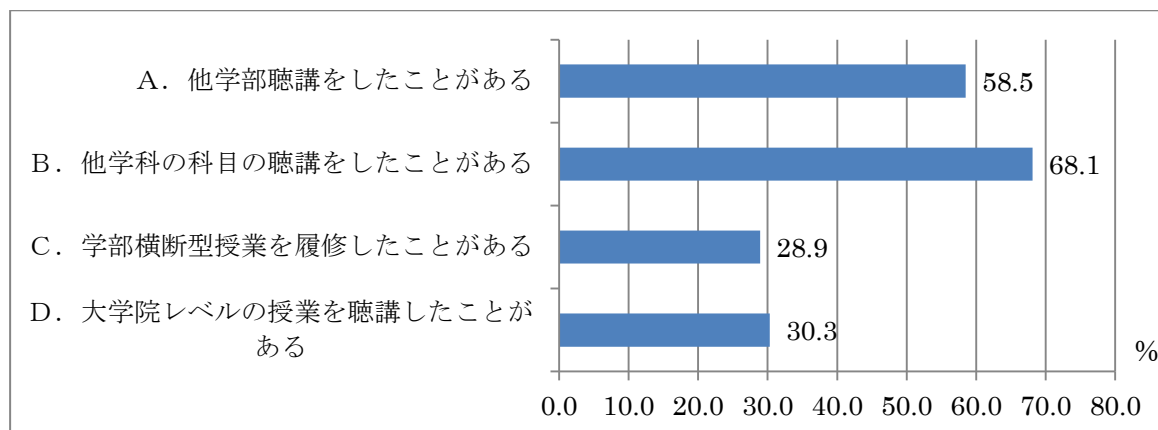


生活時間については、図16の「A. 授業・授業関連の勉強」から「E. その他」まで、5つの項目について、全体を10割としてそれぞれの項目の割合をたずねた。この割合の平均で見ると、学生が最も時間をさいているのは「A. 授業・授業関連の勉強」で、3年時で生活時間の約4割弱(3.7割)、4年時には4割強(4.6割)をさいている。これに対して「B. サークル・ボランティア活動」は3年時には約2割強(2.5割)をさいているが、4年時には2割以下(1.8割)に減少する。ただし、これはサークルやボランティア活動をしていない学生も含めた平均である。就職活動には1割以下の時間(3年時0.9割、4年時0.6割)しか使っていないが、4月からの予定を「Q30 働く」(後述)とした学生に限ると、3年時1.9割、4年時1.4割となる。

他学部聴講等

Q17 他学部聴講についてお聞きします。

図 17 他学部聴講などの経験

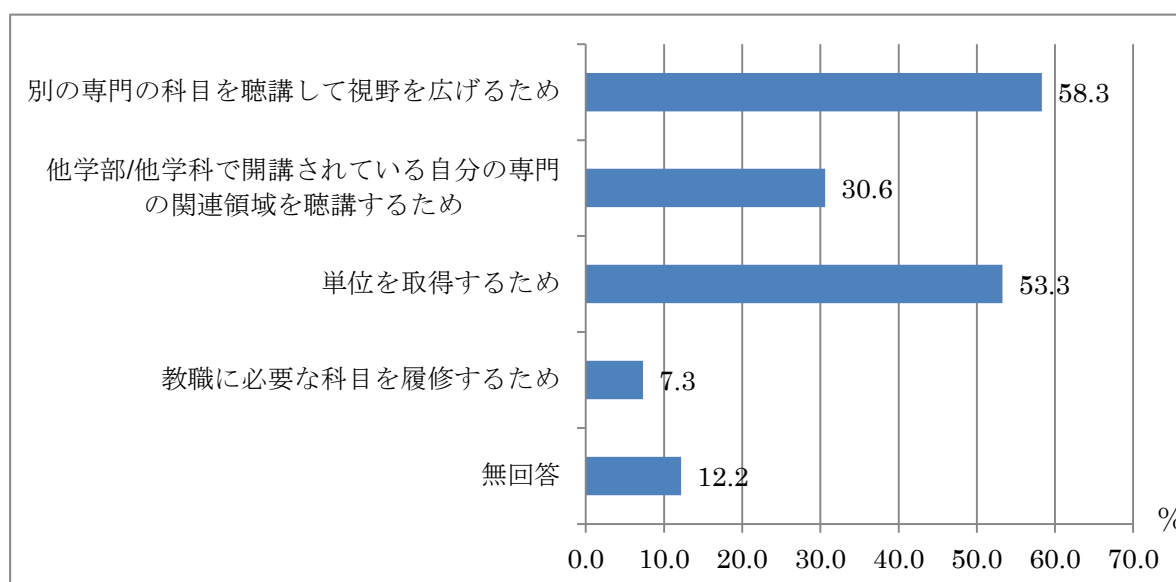


「A. 他学部聴講をしたことがある」学生は過半数（58.5%）、「B. 他学科の科目の聴講をしたことがある」学生は、約3分の2（68.1%）となっている。

※ 今年度の調査で新たに「C. 学部横断型授業を履修したことがある」と「D. 大学院レベルの授業を聴講したことがある」を加えた。前者は約3割（28.9%）、後者も3割（30.3%）となっている。

SQ1 他学部・他学科聴講を行った人にお聞きします。どういう意図で聴講しましたか。

図 18 他学部・他学科聴講の意図（複数回答）

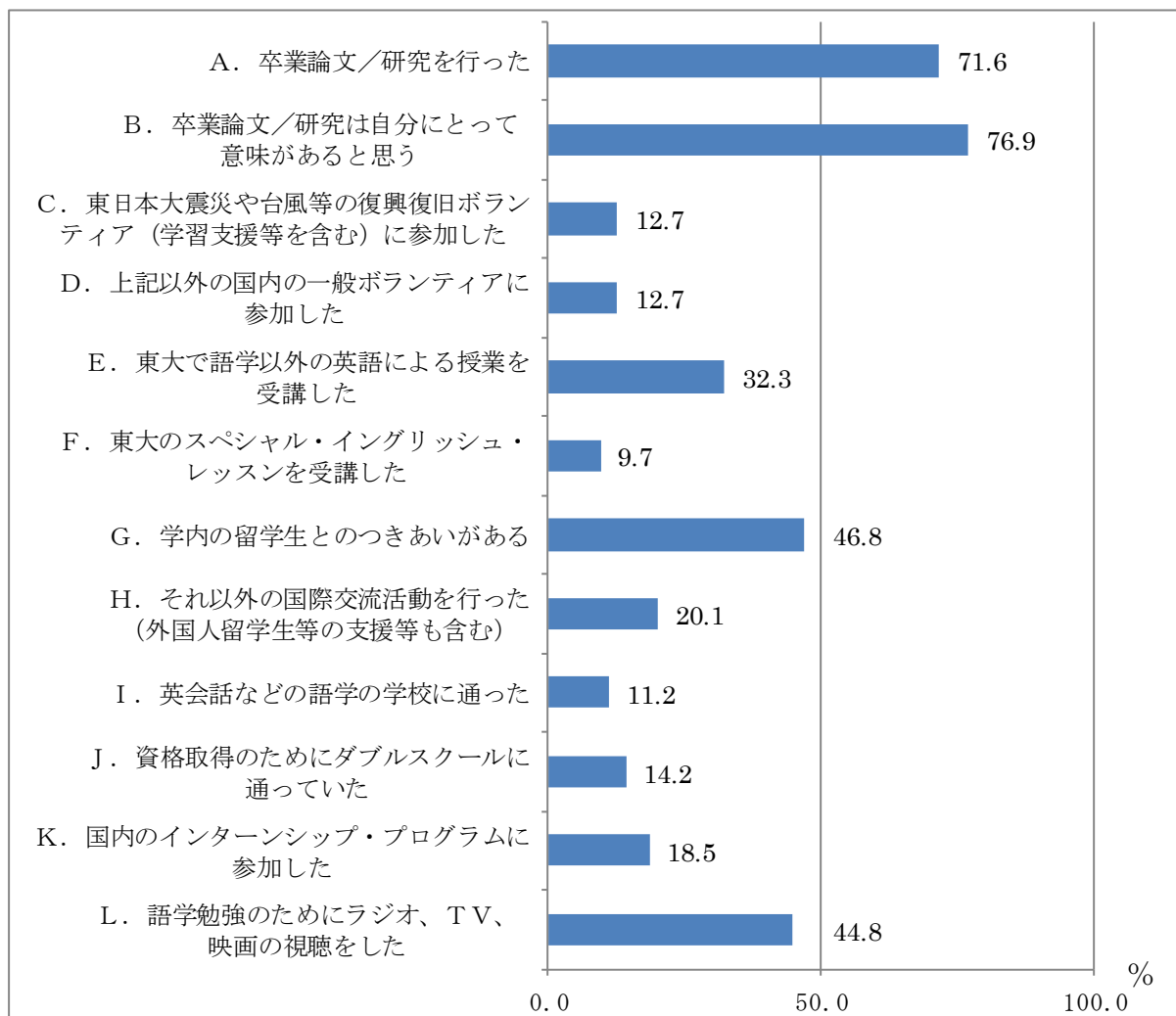


「他学部・他学科聴講」の意図は、「別の専門の科目を聴講して視野を広げるため」が58.3%と最も多くなっているが、「単位を取得するため」も53.3%と半数を越えている。

国内の学習機会・経験

Q18 国内の在学時の学習機会・経験についてお聞きします。

図 19 国内の在学時の学習機会・経験

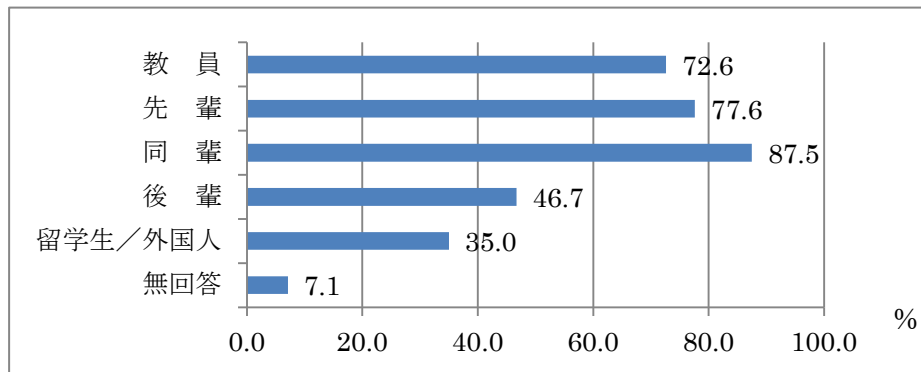


在学時の学習機会・経験として、最も高く評価されているのは「A. 卒業論文/研究を行った」(71.6%) 「B. 卒業論文/研究は自分にとって意味があると思う」(76.9%) で7割を超えている。ただし、法学部の学生が大幅に増えたこともあり、前年度の8割以上より減少している。

※ 今年度の調査で新たに「C. 東日本大震災や台風等の復興復旧ボランティア (学習支援等を含む) に参加した」を加えた。経験のある学生の割合は12.7%となっている。

Q19 あなたは、次のような人と学問的な交流がありましたか。

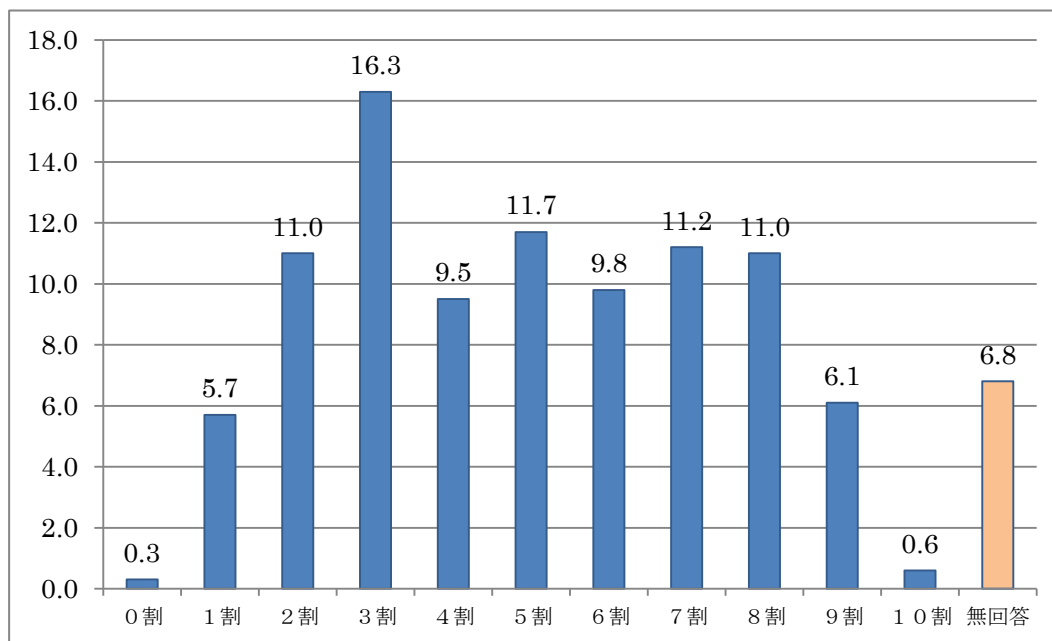
図 20 学問的な交流のあった人（複数回答）



最も学問的な交流があったのは、「同輩」で約9割（87.5%）、次いで「先輩」が約8割（77.6%）、「教員」が約7割（72.6%）となっており、「後輩」は半数以下（46.7%）、「留学生/外国人」は4割以下（35.0%）にとどまっている。

Q20 あなたの成績についてお聞きします。「優」（A）は何割くらいありましたか。数値を（ ）に記入してください。「優上」や「秀」などの優以上を含めた割合をお答えください。

図 21 優の割合



成績の自己評価について、優の割合で見ると、「3割」が最も多く、次いで「5割」となっており、正規分布ではなく、右に歪んだ分布になっている。しかし、「7割」と「8割」もやや高い割合を占め、平均では、4.9割となっている。

国際交流・留学経験・語学

Q21 在学時の国際交流経験について、それぞれあてはまる番号に○をつけてください。

図 22 在学時の国際交流経験

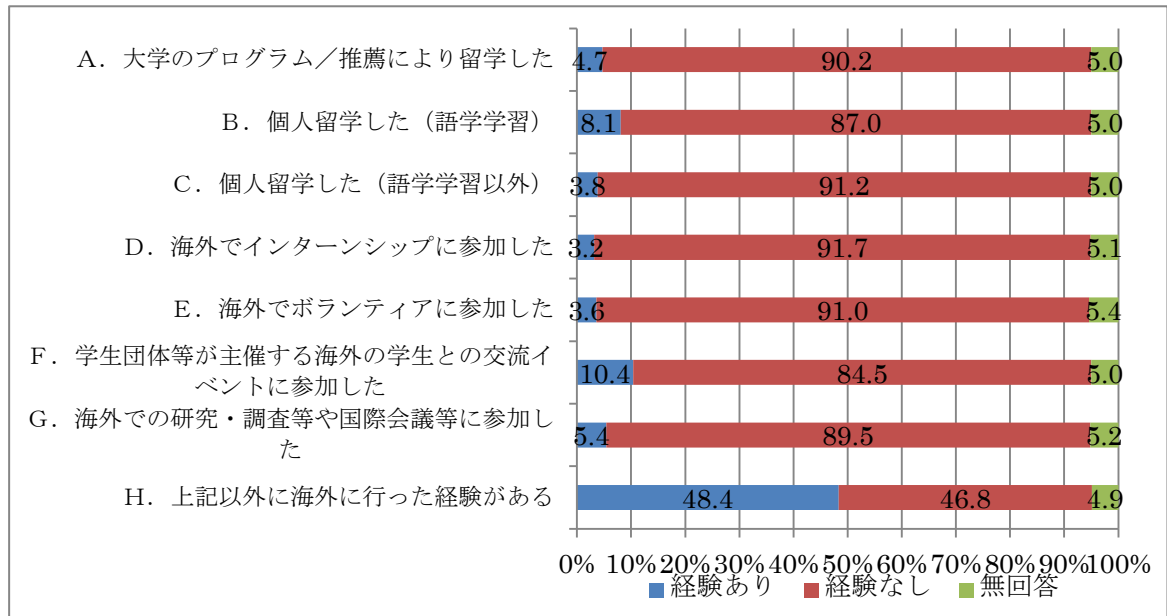
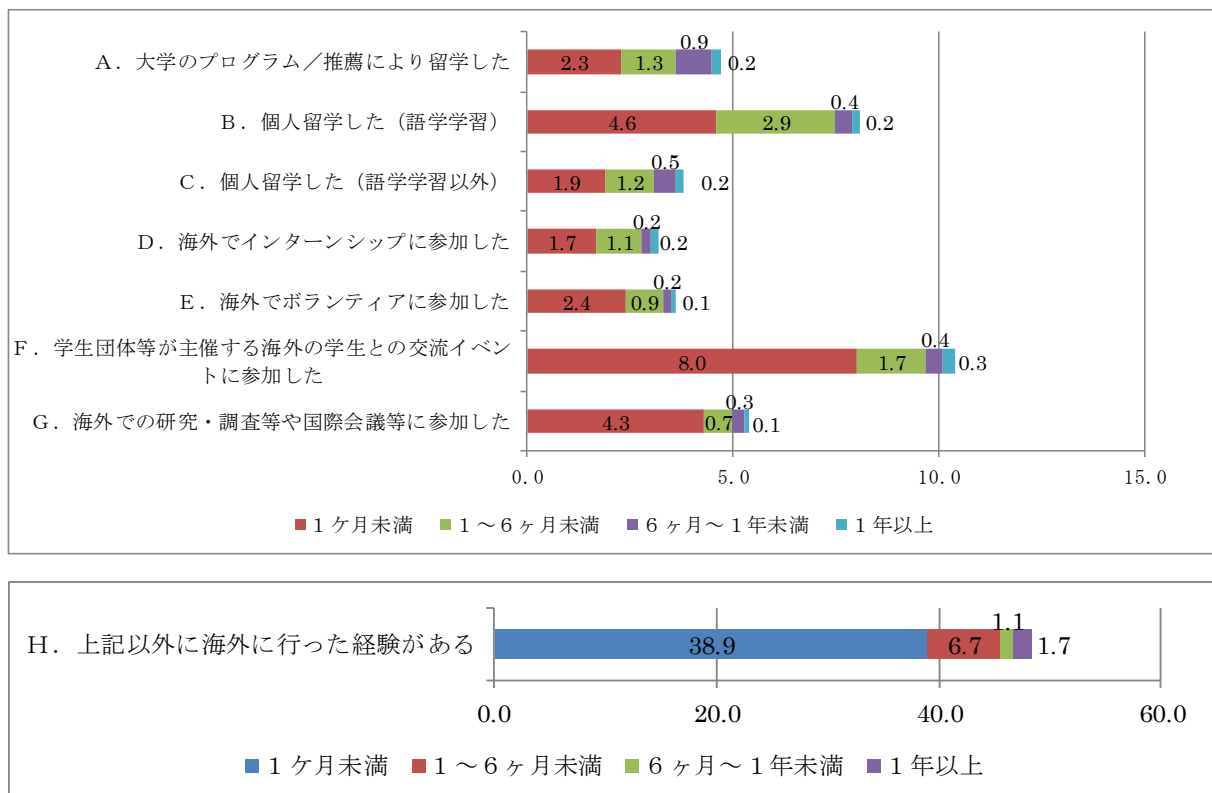


図 23 国際交流経験の期間（国際交流経験のある者のみ）



※ この質問は前年度調査と質問形式を変更しているため、前年度と比較できない。「A. 大学のプログラム／推薦により留学した」学生は 4.7%、「B. 個人留学した(語学学習)」は 8.1%、「C. 個人留学した (語学学習以外)」は 3.8%、「D. 海外でのインターンシップに参加した」は 3.2%、「E. 海外でボランティアに参加した」は 3.6%となっている。「F. 学生団体等が主催する海外の学生との交流イベントに参加した」割合は、比較的高く 10.4%となっている。

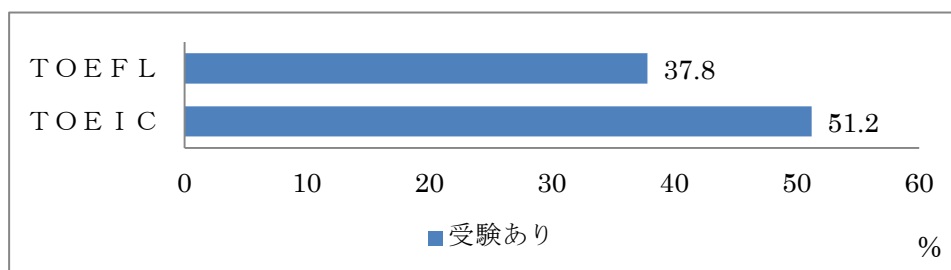
上記図 22 の A. から H. のいずれか一つでも経験がある学生は 57.9%、経験がない学生は 42.1%となる。しかし、「H. 上記以外に海外に行った経験がある」学生については、海外旅行など、A. から G. の国際交流経験とは異なると考えられる。このため、H. の経験のみの学生 31.8%を除くと、国際交流経験のある学生は 26.1%となる。

Q22 あなたは、在学中に TOEFL や TOEIC 等のテストを受験したことがありますか。

※ 前年度調査は、TOEFL と TOEIC 受験者について、成績をたずねたが、今年度の調査は受験の有無のみたずねた。前年度、TOEFL の受験経験者は 22.1%であったが、今回は、37.8%と増加している。

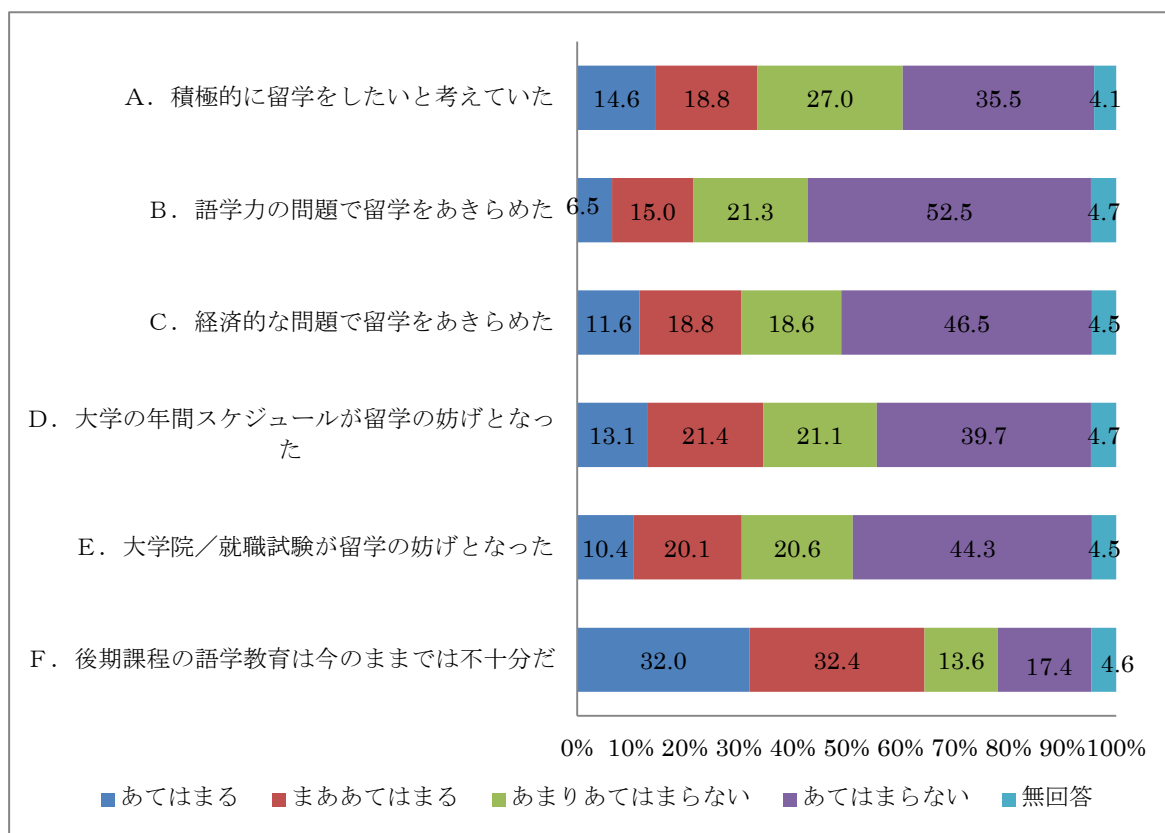
※ TOEIC についても、前年度は受験経験者が 42.9%であったが、今回は 51.2%と増加している。

図 24 TOEFL と TOEIC の受験経験



Q23 留学や語学学習についてお聞きします。

図 25 留学や語学学習



「B. 語学力の問題で留学をあきらめた」学生は、約2割（21.5%）であるが、「C. 経済的な問題で留学をあきらめた」学生は、3割（30.4%）であり昨年度とほとんど同じ傾向である。昨年度は「大学の年間スケジュールや大学院/就職試験が留学の妨げとなった」とする学生は、約4割（39.7%）となっていたが、これを「D. 大学の年間スケジュールが留学の妨げとなった」と「E. 大学院/就職試験が留学の妨げとなった」に分けた。しかし、結果としては、前者にあてはまる割合は34.5%、後者は30.5%とあまり変わらない。また、「F. 後期課程の語学教育は今のままでは不十分だ」とする学生も3分の2近く（64.4%）にのぼっている。

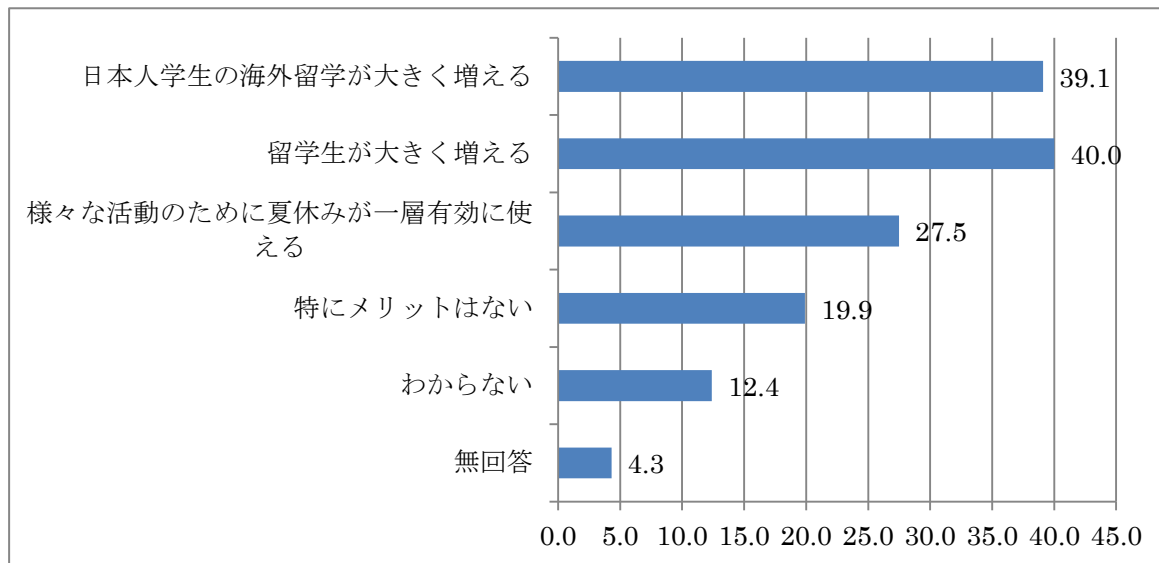
秋季入学について

※ 今回、初めて以下のように秋季入学についてたずねた。

秋季入学についておうかがいします。東京大学では、入学時期を国際標準である秋に移すとともに、夏休みを最大限確保することを検討しています(例えば入学時期を9月、夏休みを6～8月とする。)こうした秋季入学の改革案についてあなた自身の経験などをふまえ、以下の質問に答えてください。

Q24 秋季入学に移行するメリットだと思うものにすべて○をつけてください。

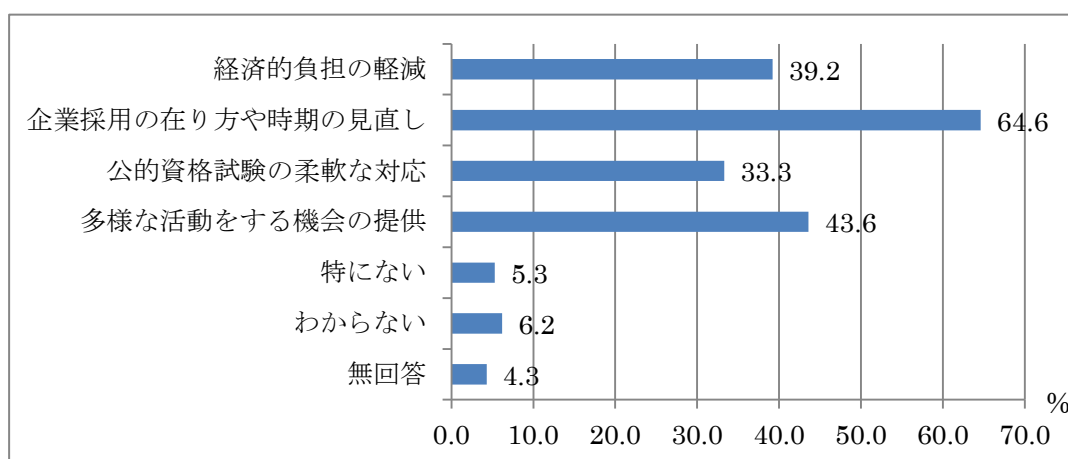
図 26 秋季入学のメリット（複数回答）



「秋季入学のメリット（複数回答）」では、「留学生在が大きく増える」が40.0%と最も高い割合であり、次いで、「日本人学生の海外留学が増える」39.1%となっている。留学に関する項目がメリットとして高い割合を占めている。

Q25 大学が秋季入学に移行し、高校卒業から就職・大学院進学までの期間が、現在より半年から1年延びる場合、大学や社会に対してどのようなことを希望しますか。あてはまるものすべてに○をつけてください。

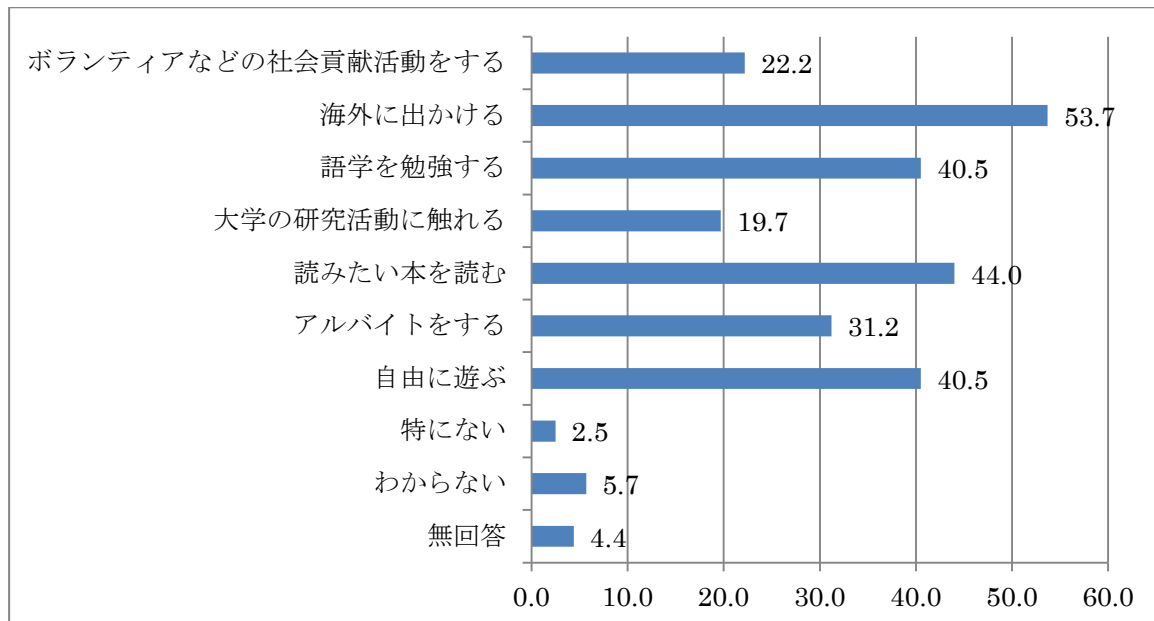
図 27 秋季入学に移行して大学や社会に対して希望すること（複数回答）



「秋季入学に移行して大学や社会に対して希望すること（複数回答）」では、「企業採用の在り方や時期の見直し」が64.6%と3分の2に近い学生が要望している。次いで、「多様な活動をする機会の提供」43.6%、「経済的負担の軽減」39.2%が高い割合を占めている。

Q26 高校卒業から大学入学までの約半年を、各自が自由に様々な体験活動をする期間(ギャップターム)があったとしたら、あなたは何をしたいですか。あてはまる番号すべてに○をつけてください。

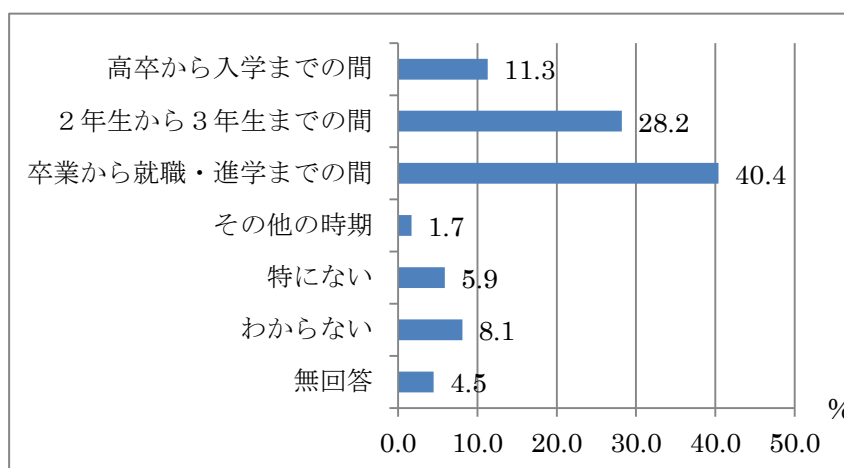
図 28 ギャップタームにしたいこと (複数回答)



「ギャップターム期間にしたいこと (複数回答)」では、「海外に出かける」53.7%と最も高い割合を示している。次いで、「読みたい本を読む」44.0%、「自由に遊ぶ」40.5%、「語学の勉強をする」40.5%となっている。

Q27 学期とは別に、ギャップタームのような自由に活動のできる期間(半年～1年)が与えられるとしたら、どのような時期がいいと思いますか。あてはまる番号に○をつけてください。

図 29 希望するギャップタームの時期 (単数回答)

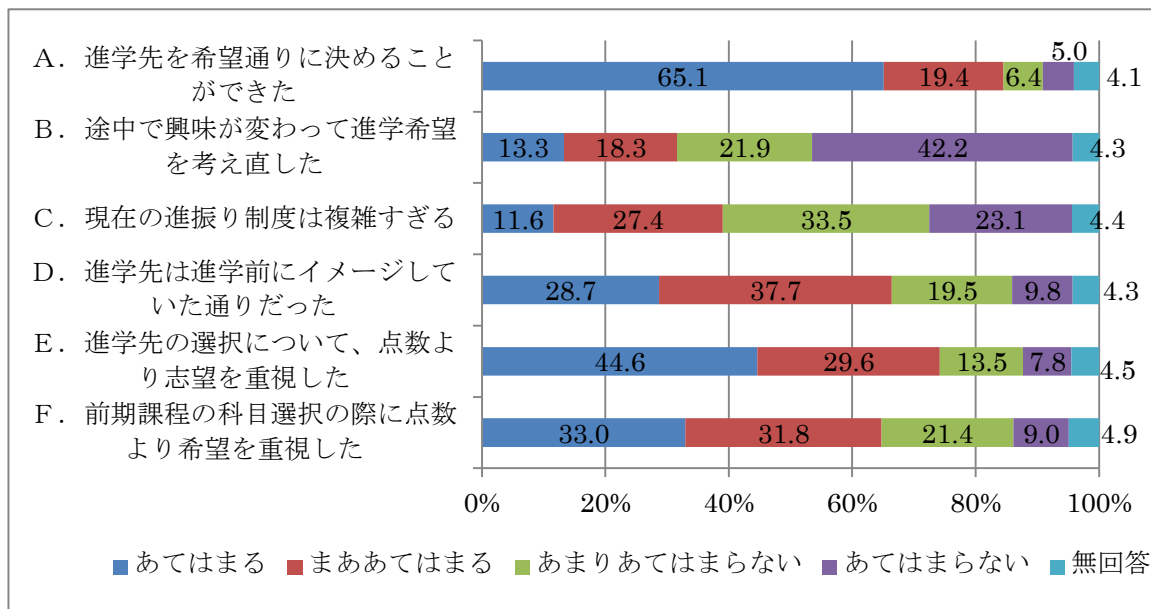


「希望するギャップタームの時期 (単数回答)」では、「卒業から就職・進学までの間」が40.4%と最も高い割合となっており、次いで「2年生から3年生までの間」が28.2%、「高卒から入学までの間」は11.3%と約1割となっている。

前期課程と後期課程の接続

Q28 進学振分けについてお聞きします。つぎの項目について、あなたはどのように考えていますか。

図 30 進学振分け制度について



「A. 進学先を希望通りに決めることができた」学生は、84.5%と8割を超えている。ただし、「B. 途中で興味が変わって進学希望を考え直した」学生も3割以上(31.6%)となっている。さらに、「D. 進学先は進学前にイメージしていた通りだった」学生は、約3分の2(66.4%)となっている。

※ 今年度の調査で新たに「C. 現在の進振り制度は複雑すぎる」を加えた。「あてはまる」は11.6%、「まああてはまる」は27.4%で合わせて約4割(39.0%)の者が複雑すぎるとしている。

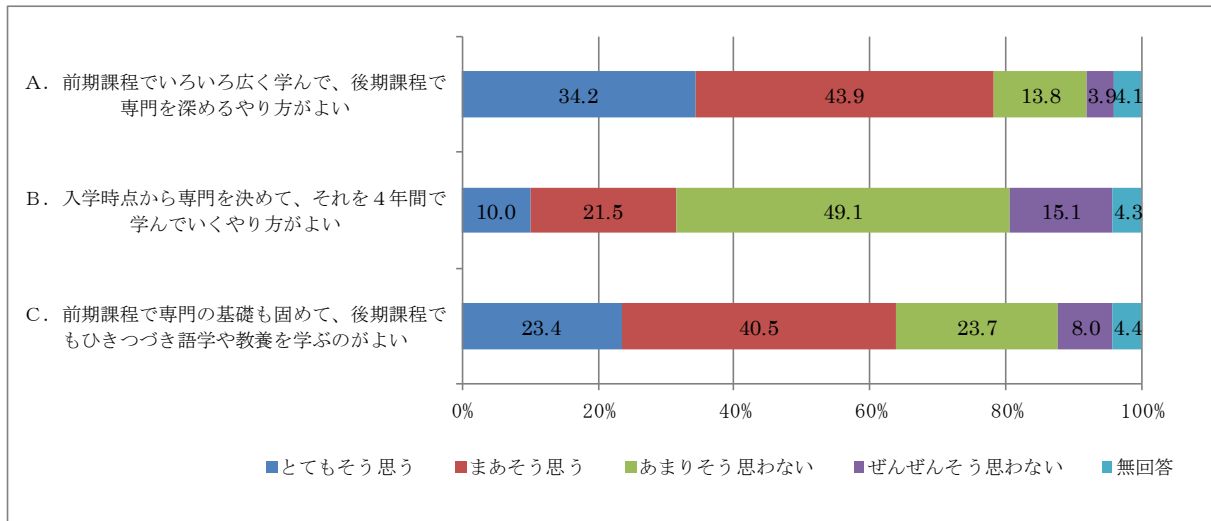
※ 今年度の調査で新たに「E. 進学先の選択について、点数より志望を重視した」を加えた。「あてはまる」は44.6%、「まああてはまる」は29.6%で合わせて約4分の3(74.2%)の者が志望を重視したとしている。

※ 今年度の調査で新たに「F. 前期課程の科目選択の際に点数より希望を重視した」を加えた。「あてはまる」は33.0%、「まああてはまる」は31.8%で合わせて約3分の2(64.8%)の者が希望を重視したとしている。

※ 今年度の調査で新たに「G. 全科類枠で進学した」かを加えた。全科類枠で進学した者の割合は、9.1%となっている。

Q29 専門と教養の学習の仕方についていくつかの考え方があります。つぎの項目についてあなたはどのように考えていますか。

図 31 専門と教養の学習の仕方について

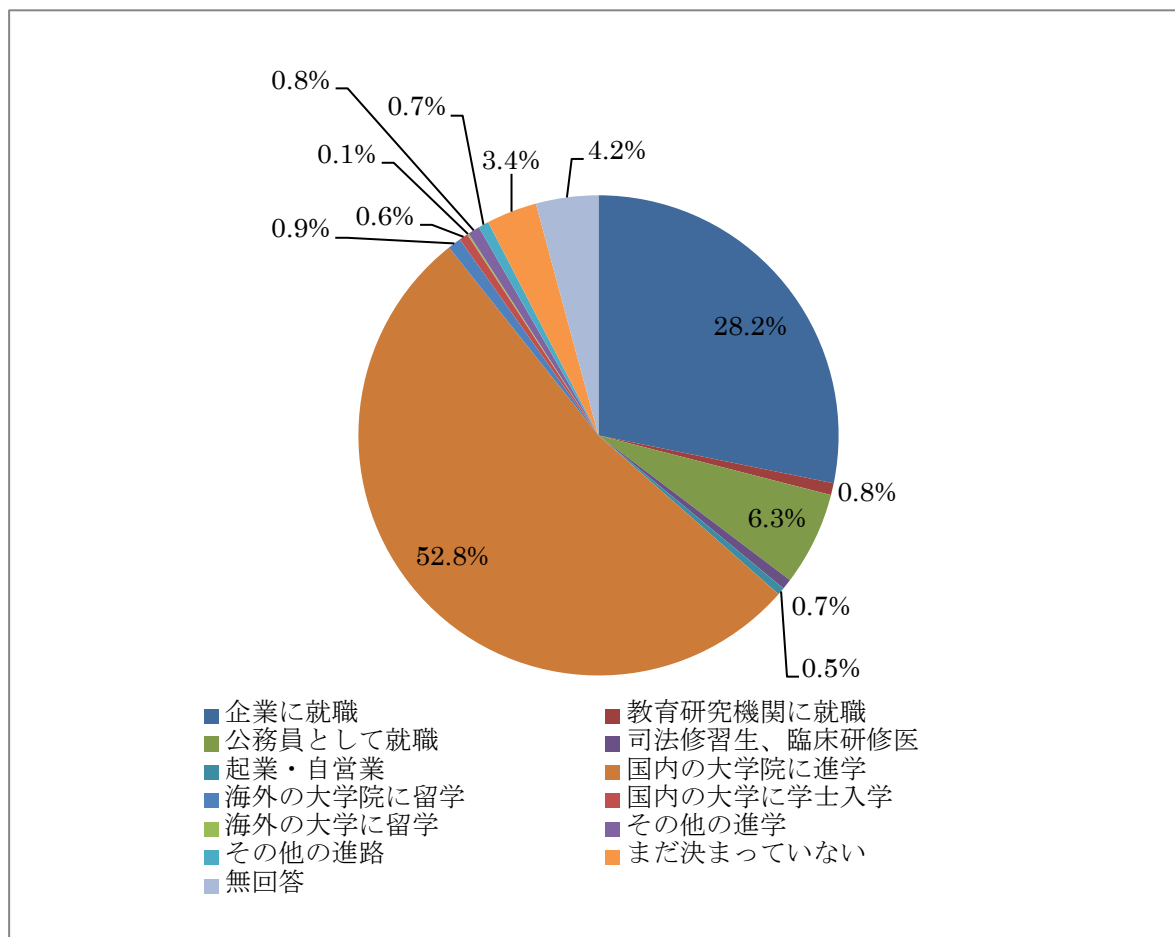


「専門と教養の学習の仕方について」では、「A. 前期課程でいろいろ広く学んで、後期課程で専門を深めるやり方がよい」という現行方式を支持する学生が、78.1%と8割近い。これに対して、逆に、「B. 入学時点から専門を決めて、それを4年間で学んでいくやり方がよい」という方式を支持する学生は3割（31.5%）となっている。また、両者の中間の方式として「C. 前期課程で専門の基礎も固めて、後期課程でもひきつづき語学や教養を学ぶのがよい」とする学生も63.9%と6割を超えている。

卒業後の進路

Q30 4月からの予定は、下の項目ではどれにあたりますか。あてはまる番号一つに○をつけてください。

図 32 4月からの予定



<p>働く</p> <p>1. 企業に就職 (28.2%)</p> <p>2. 教育研究機関に就職 (0.8%)</p> <p>3. 公務員として就職 (6.3%)</p> <p>4. 司法修習生、臨床研修 (0.7%)</p> <p>5. 起業・自営業 (0.5%)</p>	<p>学ぶ</p> <p>6. 国内の大学院に進学 (52.8%)</p> <p>7. 海外の大学院に留学 (0.9%)</p> <p>8. 国内の大学に学士入学 (0.6%)</p> <p>9. 海外の大学に留学 (0.1%)</p> <p>10. その他の進学 (0.8%)</p>
<p>11. その他の進路 (0.7%)</p>	<p>未定</p> <p>12. まだ決まっていない (3.4%)</p>

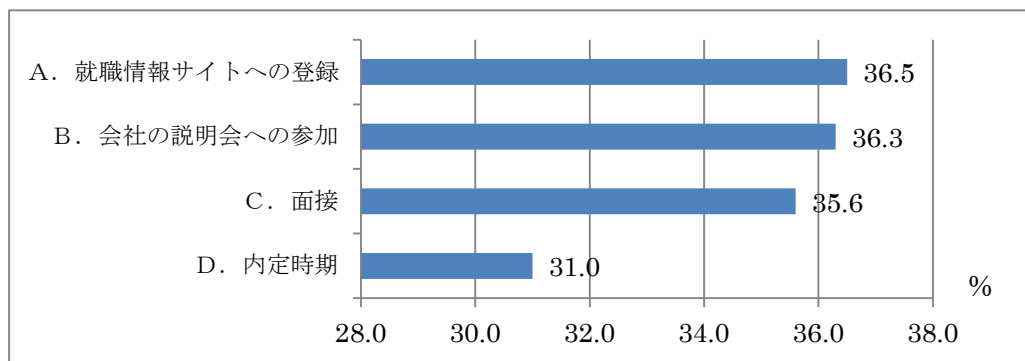
無回答 (4.2%)

4月からの予定としては、「国内の大学院に進学」が 52.8%と最も多く、その他の進学と合わせて、進学予定は、5割以上 (55.2%) となっている。これに対して、「企業に就職」は約3割 (28.2%) で、

その他の就職と合わせて就職予定は、約3分の1（36.5%）となっている。進路未定は3.4%ときわめて少ない。

Q31 民間企業への就職活動を行った人のみお答えください。あなたはつぎのような就職活動を経験しましたか。経験した場合には（ ）に時期を記入してください。

図 33 就職活動の内容



就職活動としては、「A. 就職情報サイトへの登録」が36.5%と最も高い割合を示しており、以下、「B. 会社の説明会への参加」36.3%、「C. 面接」35.6%、「D. 内定時期」31.0%となっている。

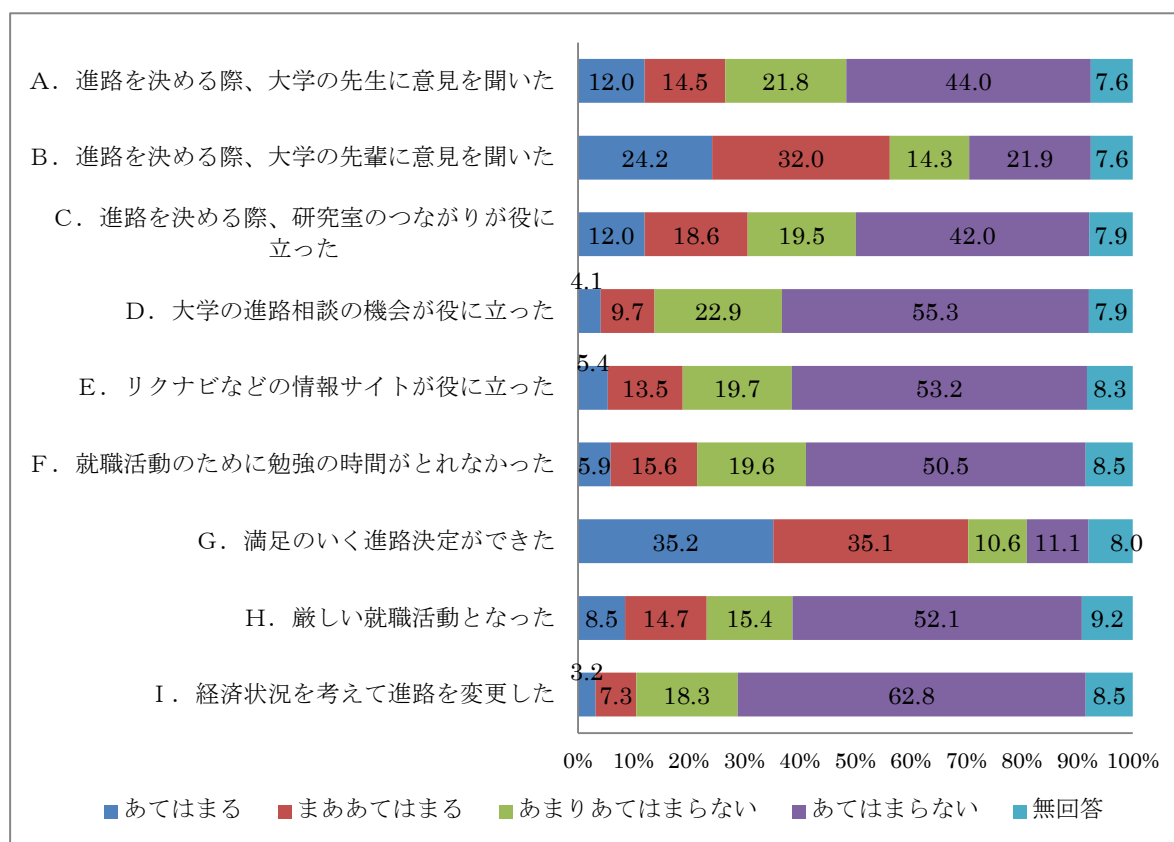
表 3 就職活動の時期

	合計	1年生	2年生	3年生前期 (4-9月)	3年生後期 (10-翌3月)	4年生前期 (4-9月)	4年生後期 (10-翌3月)	5年生前期 (4-9月)	5年生後期 (10-翌3月)	6年生前期 (4-9月)	6年生後期 (10-翌3月)	年or月不明	無回答
A. 就職情報サイトへの登録	100.0	0.1	0.6	38.1	49.2	1.9	4.3	1.2	1.2	-	-	1.0	2.3
B. 会社の説明会への参加	100.0	0.1	0.6	23.9	59.7	2.0	6.6	0.4	1.9	0.1	0.1	1.6	3.0
C. 面接	100.0	0.1	0.2	11.0	41.5	29.9	9.1	1.0	1.5	0.9	-	1.4	3.3
D. 内定時期	100.0	0.1	-	5.0	10.3	71.6	5.5	2.7	1.0	1.7	-	0.5	1.4

また、その時期については、表3のように、3年生後期に集中しており、次いで3年生前期となっている。ただし、内定は4年生前期が71.6%と最も高い割合を占めている。

Q32 あなたの卒業後の進路とその決定プロセスについてお聞きします。つぎのようなことは、どの程度あてはまりますか。

図 34 進路とその決定プロセス



進路を決める際に、最も意見を聞いた者の割合が高いのは、「先輩」(56.2%)と半数を超えている。「大学の先生」(26.5%)は約4分の1である。「研究室のつながりが役に立った」(30.6%)のは3割で、「G. 満足のいく進路決定ができた」(70.3%)のは7割となっている。「F. 就職活動のために勉強の時間がとれなかった」(21.5%)、「H. 厳しい就職活動となった」(23.2%)は、4月からの予定を「Q30 働く」とした者に限ると、どちらも46.8%となる。「I. 経済状況を考えて進路を変更した」(10.5%)者も1割いる。

主な知見

- 全体として、学生の教育に対する評価は高く、満足度も高い。教員や学生同士の交流経験が高く評価されている。反面、外国語によるコミュニケーション力に対する自己評価は低い。留学経験を持つ学生も少ない。
- 大学教育の2つの目的、すなわち専門的な深い能力と幅の広い能力が、「身についた」と「まあ身についた」を合わせると7割以上と総じて高いが、「身についた」とする学生は2割にとどまっている。
- 学生が大学時代を通じて身についたとしているのは、「問題を設定して、体系的に分析する能力」(79.6%)、「論理的な文章をまとめる能力」(74.9%)、「自分の考えを人に伝える能力」(72.2%)、

「人間関係をうまく保つ能力」(73.1%)といった汎用性の高い一般的な能力であり、「社会に出てすぐに役に立つような知識や能力」が身についたとしている学生は約4割(44.3%)に過ぎない。

- カリキュラムについても、約7割の学生は評価しているが、「専門領域の全体が理解しづらかった」という学生も4割以上(42.3%)となっている。
- 国際経験の満足度と在学時の国際交流経験との関連を見ると、国際交流経験を長期間持つ者ほど満足度が高く、国際交流経験のないことが満足度を低下させていることが分かる。
- 前年度、TOEFLの受験経験者は22.1%であったが、今回は、37.8%と増加している。
- TOEICについても、前年度は受験経験者が42.9%であったが、今回は51.2%と増加している。
- 「秋季入学のメリット(複数回答)」では、「留学生が大きく増える」が40.0%と最も高い割合であり、次いで、「日本人学生の海外留学が増える」39.1%となっている。留学に関する項目がメリットとして高い割合を占めている。
- 「秋季入学に移行して大学や社会に対して希望すること(複数回答)」では、「企業採用の在り方や時期の見直し」が64.6%と3分の2に近い学生が要望している。次いで、「多様な活動をする機会の提供」43.6%、「経済的負担の軽減」39.2%が高い割合を占めている。
- 「ギャップターム期間にしたいこと(複数回答)」では、「海外に出かける」53.7%と最も高い割合を示している。次いで、「読みたい本を読む」44.0%、「自由に遊ぶ」40.5%、「語学の勉強をする」40.5%となっている。
- 「希望するギャップタームの時期(単数回答)」については、「卒業から就職・進学までの間」が40.4%ともっとも高い割合となっており、次いで「2年生から3年生までの間」が28.2%、「高卒から入学までの間」は11.3%と約1割となっている。
- 「専門と教養の学習の仕方について」では、「前期課程でいろいろ広く学んで、後期課程で専門を深めるやり方がよい」という現行のlate specialization方式を8割近い(78.1%)学生が支持している。他方、「進学振分け制度について」では、4割近くの学生が「現在の進振り方式は複雑すぎる」としている。